経営のひろば

NHKドラマ「花燃ゆ」の時代

富山短期大学名誉教授　川中清司

●幕末日本―外敵から守る情熱

NHK大河ドラマ「花燃ゆ」は激動の幕末、日本を憂えて立ち上がった若者たちの姿を描く。

吉田松陰は、日本が外敵から侵略されるという強い危機感を抱いた。時の老中、間部詮勝（鯖江藩主）は攘夷派の敵であり、志士たちを弾圧する青鬼であるとして、これを処断すべしと立ち上がる。ついに幕府に捕らえられ二九歳の若さで斬首された。

だが、その思想は若者たちによって引き継がれ、明治維新の達成へと昇華していった。

●吉田松陰の思想―知行一致

吉田松陰は陽明学に深く傾倒していた。陽明学は中国の明の時代に王陽明が説いた。当時全盛だった朱子学に対して、「権威に盲目的に従うのではなく、己の責任をもって行動する心」の重要性を説いた。

現実を批判して、その矛盾を改めるべく行動に移す革命的思想で、「知行一致」の実践を目ざした。知行一致とは、知識と行動は一体であり、「決断したことは直ちに行動する」というものだ。

松陰は「至誠にして動かざる者、いまだこれ有らざるなり」。誠を尽くして接すれば心を動かさない者はいない。真心を込めて努力すれば必ず通ずる。松陰は、この信念を貫き通した人である。

●民衆の奮起を期待

松陰は「草莽崛起（そうもうくっき）」を呼びかけた。草莽とは草むら、崛起は立ち上がる力だ。民衆よ立ち上がれと叫んでいた。松陰が門下生の入江杉蔵に宛てた手紙に「事をやるには草莽でなければ人物なし」、事をなしとげるには民衆しか人物はいない、と書いた。「幕府も諸侯も、もはや酔人なれば扶持の術なし」、幕府も大名も酔っぱらいと同じで救いようがない。「草莽崛起の人を望む外、頼みなし」、民衆の中から立ち上がる人こそ、期待すべきだと述べている。

この思想を受けて、高杉晋作は奇兵隊を組織した。士農工商の身分を問わず参加を呼びかけた。薩長に並ぶ最強の部隊として活躍し、長州征伐で幕府軍を破るなど草莽崛起の思想を実現した。

●若年に講義―藩主が賞賛

松陰は文政一三（一八三〇）年に長州藩士の杉家の次男に生まれ、六歳のとき山鹿流兵学指南の吉田家の養子となり、スパルタ教育を受けた。一一歳のときには藩主・毛利慶親（よしちか）に「武教全書」を講義した。藩主は「儒学者のように堅苦しくなく、素晴らしい」と褒め讃えた。後に長州藩の兵学師範となる。

このころ、アヘン戦争で清（中国）が破れ国土が侵されたことを知り、西洋兵学を学ぶことの重要さを悟る。嘉永三（一八五〇）年に九州に遊学。さらに江戸に出て佐久間象山に師事した。

●藩主毛利慶親―そうせい候

毛利慶親は長州藩の第一三代藩主で、幕末の混乱の中で有能な家臣を登用し活躍させた人材活用の名君だった。家柄や年齢にこだわらず、家臣の意見もよく聞き入れた。いつも「そうせい」と返答したので「そうせい候」と呼ばれた。

その歩みを振り返ってみると、藩士たちの主張を受け入れて多くの厳しい難局を乗り切っている。文久三年五月に外国船の打ち払いを断行。七月には京に出兵し禁門の変。八月、幕府の長州征伐への対処。慶応二年に薩長同盟を結び、王政復古のクーデターを成功させた。司馬遼太郎も「彼ほど賢候はいない。藩内の賢士を近づけた」と評している。

●脱藩して諸国視察

松陰は嘉永五（一八五二）年に宮部鼎蔵らと東北視察を決行した。約束の日になっても藩の通行手形が届かず、脱藩覚悟で出発した。

水戸で会沢正志斉と会い、会津で日新館を見学、東北鉱山の実情を視察、秋田では相馬大作事件の現場を訪れる。さらに津軽海峡に出て外国船の見学を試みた。わらじばきで雪深い山を越え、三月五日に竜飛岬にたどり着く。無防備な海峡に立って、外国の軍艦が航行するのを嘆いた。江戸に帰って脱藩の罪に問われ士籍剥奪の処分を受ける。

●黒船来航と密航計画

嘉永六（一八五三）年にペリーが浦賀に来航し、師の佐久間象山とこれを見る。西洋文明に大きな衝撃を受け、外国留学を決意する。長崎に寄港していたロシア軍艦に乗船を目ざすが、すでに出港したあとで目的を果たせず。

嘉永七（一八五四）年に再び来航した米軍艦ポーパタン号に小舟で漕ぎ寄せて、渡航を懇願するが拒否される。下田奉行所に自首して結局、長州へ送られて自宅に閉門処分される。翌年、ここで私塾の松下村塾を開き、後に倒幕運動や明治維新を成し遂げる有為の青年を育てることとなる。

●松下村塾に集う若者

松下村塾は武士や町人など、身分の隔てなく塾生を受け入れた。物置小屋を改造した八畳間で、誕生から閉鎖までわずか二年ほどの間に九二人が通った。塾生は八歳から三五歳まで、伊藤博文は一六歳、吉田松陰は二五歳という若さだった。

松陰は「私は先生じゃない、君たちと学友だ、君と僕だ」と、お互いの議論を通じて啓発していった。松陰は三つを教えた。

一、志を立てよ。目標、理想を持て。日本の国を守れ

二、友を選べ、お互いに長所欠点を学べ

三、本を読め。昔の偉人から学べ

塾生のうち、明治維新を前にして倒れた者も多いが、生き残った者は、伊藤博文、山県有朋の内閣総理大臣をはじめ、多数の大臣や大学の創始者など、近代日本を築いた人物を輩出した。

松下村塾　萩観光協会資料より転載

●アヘン戦争に危機感

天保一一（一八四〇）年に清国は英国の侵略を受けた。そのころヨーロッパでは産業革命が進み、生産された物資を外国に売り、植民地政策が進んでいた。

英国は植民地のインドで栽培したアヘンを清国に売りつけようとしたため、清国との間で戦争が勃発した。大国を誇る清国であったが、近代装備を持つ英国軍隊になすすべもなく敗退し、不平等な南京条約を結ばされた。これに便乗する米国や仏国も同様の条約を結ぶ。清国は列強の植民地支配の

安政の大獄（安政 5～6 年）の前後

1853（嘉永6）年6月	・黒船来航 ・幕府の権威低下
1854（嘉永7）年	・日米和親条約を締結 ・このころに将軍後継ぎ問題起こる
1857（安政4）年10月	・ハリス通商条約締結を要求 ・堀田正睦、上京するも勅許を得られず
1858（安政5）年6月	・勅許を待たず日米修好通商条約に調印 ・不時登城（攘夷派・一橋派諸大名）と処罰 ・将軍後継は徳川慶福（家茂）に決定
〃　8月	・戊午の密勅・安政大獄始まる・9月梅田雲浜逮捕
〃　12月	・叡慮氷塊 ・間部詮勝が孝明天皇から諒解得る
1859（安政6）年10月	・橋本左内斬首（7日） ・吉田松陰斬首（27日） ・留魂禄を残す
1860（万延元）年3月	・桜田門外の変 ・井伊直弼、暗殺（3日）
1861（文久元）年10月	・公武合体と和宮の降嫁
1862（文久2）年5月	・島津久光、江戸城乗り込み ・文久の幕政改革
1863（文久3）年	・薩英戦争
1864（元治元）年	・禁門の変 ・長州征伐
1866（慶応2）年	・薩長同盟結成
1867（慶応3）年	・大政奉還

餌食となった。

●黒船来航に危惧

日本にも同様の危機が迫っていると、尊皇攘夷派は強い危機感を抱いていた。日本は軍備も弱く諸藩がバラバラで統治力が弱い。今の幕藩体制では事態に対処できない。天皇を中心に統治された国家を目ざすという「尊皇攘夷」の理想を描いていた。

嘉永七（一八五四）年に日米和親条約が結ばれ、二五〇年の鎖国政策は終わった。国家存亡のとき、次の将軍をめぐり紀州藩主徳川慶福（よしとみ）を推す譜代大名勢力と、一橋慶喜（よしのぶ）を推す親藩・外様大名勢力が対立していた。

●無断調印・戊午（ぼご）の密勅・安政の大獄

安政六（一八五九）年六月、幕府は日米修好通商条約に調印した。勅許を得ない無断調印に孝明天皇は激怒し、事情説明に御三家か大老の上京を要求した。

七月、一三代総軍徳川家定が死去し、京都出発が延期した。福井藩主の松平慶永をはじめ、尾張の徳川慶篤、土佐の山内豊信らの各藩主らが不時登城して、幕府の無断調印を責めた。これに対して井伊大老は不時登城の罰として、隠居、謹慎の処分を下した。

八月、天皇から水戸藩に勅諚が下る。幕府の無断調印の責任や、尾張、水戸などの処罰を責めるもので、これを「戊午の密勅」という。

幕府の存在を無視された井伊大老は、密勅に加担した者の一斉検挙を厳命し、ここに安政の大獄が始まる。

●不平等条約で経済混乱

条約の締結と開港は日本経済に大きな混乱をもたらした。生糸の輸出急増で国内の原糸が逼迫し、織物生産ができなくなった。桐生、博多、丹後、八王子、秩父などの機業は深刻な打撃を受けた。中でも京都西陣は、万延元年に井伊大老から三万両の救済金を借りるほど落ち込んだ。

綿布の輸入が急増し、綿織物産地も大きな打撃を受けた。武蔵越塚の結城織、足利、伊勢松坂、愛知、岐阜などの綿織物の機業も破滅に追い込まれた。商人の買いだめなどで物資が不足し、物価が高騰して庶民の生活は困窮した。

●重税と物価高に民衆反発

条約は関税主権を持たず、治外法権を承認するという不平等条約だった。大量の金貨が国外に流出した。金一に対する銀の交換が、日本は五、外国では一五と異なり、外国から大量の銀を日本に持ち込んで金貨と交換させられた。幕府は一八六〇年に万延小判に改鋳したが、通貨量が増えてインフレを巻き起こした。

各藩では財政が悪化し増税を強いた。下級武士の生活も窮乏した。文久時代（一八六〇年代）に入ると、農民は重税と米価の高騰に耐えかねて、地主や特権商人を襲う打ち壊しが頻発した。「世直し一揆」が各地に起きた。慶応三（一八六七）年には「ええじゃないか」が流行り、空からは伊勢神宮のお札が降ってきて、人々は熱狂して町を踊り歩く。乱舞する民衆の波が全国に広がっていった。

●老中間部詮勝の襲撃を自供

話は安政のころに戻るが、幕府は先に逮捕した梅田雲浜（若狭・小浜藩士）が、萩で吉田松陰と会ったという証言を得ていたことから、松陰を危険人物としてマークした。

そのころ、京都で幕府を批判する落書き事件が起きた。それを松陰の仕業とみて、長州藩に江戸送りを命じた。調べに対して松陰は、「落書きなどしない」、正々堂々と長州藩を中心に挙兵し、鯖江候（間部詮勝・老中）を撃とうとしたのだと言い放った。

「日本を夷敵（外国）の侵略から守るべきであり、そのためには外国に迎合する弱腰の幕府を倒さねばならない」。その主張を公然と述べたのだった。

●長州藩に打倒計画を上申

松陰の間部暗殺計画は、幕府の開国の暴走を止めるためだった。勤王の魁（さきがけ）の快挙を遂げて、天下に示すという情熱に燃えていた。長州藩の重臣、周布政之助に宛てた書状・安政五（一八五八）年一一月六日付には、次のように記載されている。

「私共、時事憤慨、黙止し難く候間、…早々上京仕り、間部下総守…打果たし、御当家勤王の魁仕り、天下の諸藩に後れず、江家の義名末代に輝かし候仕利たく存じ候」。私どもは、時事に憤慨し黙止できない。連名の人数で上京し、間部を討ち果たし、諸藩に後れずに末代に輝かせたい。

●福井藩も井伊、間部の襲撃を計画

同じころ福井藩でも、藩主春嶽が不時登城の罪で幕府から隠居処分を受けたことに対して、改革派が倒幕行動を計画していた。勘定

奉行の長谷部甚兵衛は、「玉（春嶽）を盗みだし、一番に青城（鯖江・間部詮勝）を屠り、二に彦根（井伊直弼）を火し、前後相応じて帝都を鎮護し」との挙兵計画の書状を左内に送っている（橋本景岳全集）。江戸で謹慎中の春嶽を連れ出して福井で兵を挙げ、鯖江と彦根を焼き討ちする。さらに京都を制圧し、天皇を奉じて有志諸藩と一旗あげるというものだ。

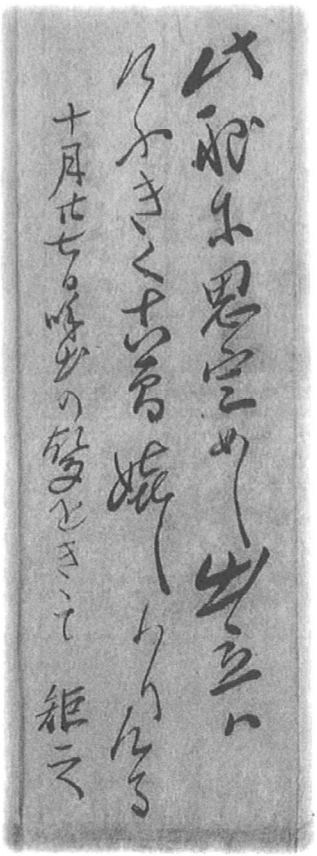
江戸では橋本左内、三岡八郎（後の由利公正）らが、薩摩や長州の藩士と謀って、井伊大老の登城を要撃し、京都で越前・長州等藩兵と同時決起を画策していた。このクーデター計画も、安政の大獄の強行で左内が処刑され、福井藩主に茂昭を迎えて保守派が台頭して消滅する。

●松陰の潔い最後

安政六年一〇月二七日、いよいよ松陰の処刑の日がきた。その心境は鏡のように穏やかで、国のために死地に赴く潔さを感じていた。悠々として歩き、役人に一礼して、ご苦労様と言って端座した。その堂々たる態度に幕吏たちも深く感嘆したという。

刑場へ呼び出しを受けたとき、悠然として詠んだ歌が直筆で残されている。

「此の程に　思（い）定めし　出立（いでたち）ハ　けふ（今日）きく古曽（こそ）　嬉しかりける　十月二十七日呼出の声をききて　矩方（松陰）」。死への旅立ちを「嬉し」と詠んでいる。この辞世は井伊直弼の腹心、長野主膳の書状の中にあったもので、井伊家ゆかりの井伊達夫氏によって発見された。



吉田松陰の辞世・井伊達夫氏蔵（鯖江市まなべの館・資料より転載）

●松陰と左内　獄中で交う憂国の心

松陰と橋本左内は短い期間、江戸の小伝馬町の同じ獄舎に繋がれていた。だが、実際に会うことはなかった。憂国の志に燃える二人は、どんな思いで過ごしたのであろうか。

この時、左内から松陰に贈った漢詩二首が残されている。前の詩は、松陰が米軍艦に乗船する海外渡航が失敗したことを嘆いている。後の詩は「磊落軒昂意気豪　聞言夫君胆生毛（以下略）」と詠う。松陰の度量が大きく、意気が高く揚く、強く優れた気性を備えていると賞賛している。

●留魂禄に書き残す左内の最後

松陰は処刑を前にして、松下村塾の門弟たちのために留魂禄を記した。今も松陰神社に残されている。

「身はたとひ　武蔵の野辺に朽ちぬとも　留め置おかまし　大和魂」の歌に始まる。その末尾には、橋本左内の処刑を嘆き、次のように書き残している。

「橋本左内が二六歳で処刑された。一〇月七日だった。左内は東奥の部屋に五～六日座っていた。同居していた勝野俣太郎の話では、左内は幽閉中に『資治通鑑』を読んで注釈を作り終えた。獄中では数学や技術などを論じていた。嗟々（ああ）、本当に左内と会って議論がしたかった」。

●後世に伝わる松陰の心情

留魂禄は二通作り、一つは松陰の処刑後、門弟たちが書き写し今日に伝わる。もう一通は、獄中で沼崎吉五郎に託されて、三宅島に遠島となったが、褌の中に隠し持ったまま維新を迎え、後に松陰門下のゆかりの神奈川県権令の野村靖に渡った。

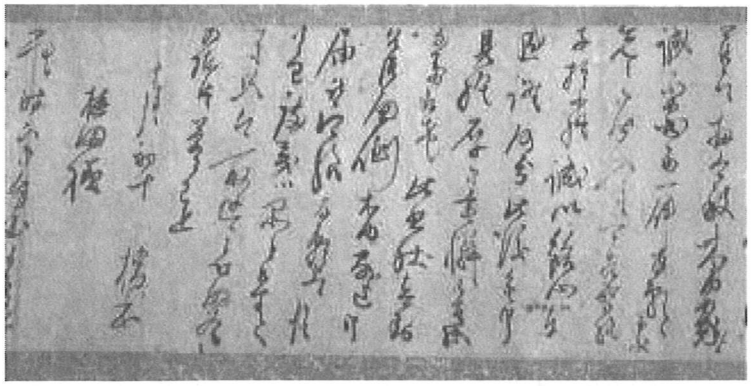
末尾に「呼び出しの声まつ外に　今の世に　待つべき事のなかりけるかな」と歌い、一〇月二六日黄昏に書すとし、淡々たる心境がうかがえる。

松陰の掲げた思想は、この留魂禄によって伝えられ、バイブルの役割を果たした。

●橋本左内と鯖江藩家老の親交

橋本左内の姉が福井藩士の木内佐織に嫁いでいた。その養子に鯖江藩の家老、植田頼母の弟を依頼していた。左内から頼母に宛てた依頼状がこのほど公開された。書状の日付けは安政五年一〇月一〇日。左内が安政の大獄で斬首される安政六年一〇月七日のちょうど一年前だった。

当時、福井藩主松平春嶽と鯖江藩主間部詮勝は、安政の大獄をめぐって対立する陣営に立っていた。



橋本左内の書いた書状。鯖江藩家老植田頼母に宛てたもの（鯖江市まなべの館・資料より転載）

緊迫した政局の中でも、藩士の間では親密な交流が続いていた。養子の話は実らなかったが、厳しい武家社会のなかで人間らしい温かさが偲ばれる。

●間部詮勝の功績

間部詮勝は三五歳で京都所司代となり、京都や西日本の治安維持や朝廷・公家との折衝に携わった。鯖江五万石の大名としては破格の出世だった。天保一一（一八四〇）年、西の丸老中に就任するが、老中の水野忠邦と幕政改革で対立して辞任する。

当時、鯖江藩の財政は火の車で、一七万両（約二〇〇億円）の借金を抱えていた。藩財政の九倍にも達する額だった。特産物を奨励し積極交易に努めるなど、財政立て直しに尽力した。学問を奨励し「進徳館」を開く。幕府からもらった築城費用の五〇〇〇両も庶民のために使っている。

後に五万本のツツジが咲き、北陸一を誇る市民の憩いの場となっている響陽渓（きょうようけい）を開いて領民に開放した。

●難局打開の大任

安政五（一八五八）年に井伊直弼が大老に就くと、間部詮勝は一五年ぶりに入閣し、勝手掛と外交掛（財務大臣と外務大臣）を任命された。

間部と井伊は、かつて江戸城の「溜間（たまりのま）」で同じ席だった。間部は歳も一回り上で城内のしきたりや幕閣の駆け引きも心得ていた。京都所司代時代の経験から朝廷や公家の諸式にも精通していた。信頼を得て老中に任命された。

間部は日米修好通商条約の締結の事情を説明し、勅許をいただくという重要な役割を命じられた。その上京の途中で浪士の逮捕弾圧の指令を受けた。

●叡慮氷塊の功、報われず

一二月三〇日、間部詮勝はついに孝明天皇から「条約調印のやむを得ない事情を承知した」との勅を得ることに成功した。これを叡慮氷塊（えいりょひょうかい＝天皇の考えが解けた）という。しかし軍備が整えば鎖国に戻すとの条件も明記されていて、これを明らかにすれば、外国との関係悪化を懸念して明らかにできずに終わった。

間部詮勝は安政の大獄では、諸侯や有能な人物の処刑については寛大な処置を提案したが、井伊大老は厳罰の断行を命じた。井伊と間部は対立し、安政六（一八五九）年に間部は老中を解任され幕閣を去った。

その二カ月後、万延元（一八六〇）年三月三日、桜田門外で井伊直弼が暗殺された。その後急激に政局が移り変わり、七年後の慶応三年、ついに大政奉還に至った。

今、鯖江市では間部詮勝の鯖江藩主就任二〇〇年を記念して、業績を顕彰しその足跡を研究する催しが四年がかりで行われている。

―二〇一五年六月記す―